

審査論文要旨 (日本文)

論文提出者氏名： 菊池 宏幸

審査論文

題名： Gender differences in association between psychological distress and detailed living arrangements among Japanese older adults, aged 65–74 years (前期高齢者における精神健康度と世帯構成の関連およびその性差)

著者： Hiroyuki Kikuchi, Tomoko Takamiya, Yuko Odagiri, Yumiko Ohya, Tomoki Nakaya, Teruichi Shimomitsu, Shigeru Inoue

掲載誌： Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology (2013 October 4 [Epub ahead of print])

(審査論文要旨：日本語論文の場合 1,000 字以内・英語論文の場合 500 words)

【背景・目的】 先行研究において高齢者の独居は精神疾患発症のリスク要因と報告されている。高齢者にとって同居者がいることは食事などの生活習慣や社会的サポートなど好ましい面が多い一方、感情的な諍いなど負の側面もありうる。このため、誰と同居しているのかによっても精神的健康度が異なる可能性があるが、これまでほとんど検討されてこなかった。そこで、本研究の目的は、地域在住高齢者の世帯構成と精神健康度との関係を男女別に明らかにすることとした。

【方法】 国内 3 自治体(東京都文京区、東京都府中市、静岡県小山町)の住民基本台帳より無作為抽出した 65～74 歳の高齢者 2,700 名(各自治体 900 人、男女比 1:1)に対し郵送質問紙調査を実施し、回答を得た 2,045 名のうち、データ欠損のない 1,807 名を分析対象者とした(有効回答率 66.9%)。精神健康度の評価尺度は、“Kessler の心理的ストレス質問紙 6 項目版(K6)”を用い、5 点以上を精神健康度不良と判定した。世帯構成は、「一人暮らし」「高齢夫婦のみ」「高齢夫婦とその他の家族が同居」「高齢者一人とその他の家族が同居」に区分した。「高齢夫婦のみの世帯」を対照群とし、その他の世帯構成における精神健康度不良のオッズ比(OR)を、年齢、居住地、教育歴、就労有無、身体機能制限、中等度以上の身体活動を調整変数とした多重ロジスティック回帰分析を用いて男女別に算出した。

【結果】 対象者のうち、男性では 202 名(21.7%)、女性では 205 名(23.4%)が精神健康度不良と判定された。年齢、居住地、教育歴、就労有無、身体機能制限、中等度以上の身体活動を調整してもなお、男女とも、「一人暮らし」において精神健康度不良者の割合が高かった。(男性：OR;1.99, 95%信頼区間[CI];1.15-3.46、女性：OR;1.81, 95%CI;1.08-3.05)。また男性では「高齢者一人とその他の家族が同居」世帯にも精神健康度不良が多かった (OR;2.85, 95% CI;1.51-5.39)。

【結論】 高齢者において精神健康度と世帯構成は有意に関連し、男女とも「一人暮らし」で精神健康度不良者の割合が高かった。さらに、精神健康度と世帯構成との関連には性差が認められ、女性では同居者がいるかどうか精神健康度と関連していたのに対して、男性では同居者に配偶者が含まれているかどうか精神健康度と関係していた。今後の高齢者の精神疾患対策では、独居か否かのみならず、同居者に配偶者が含まれているかどうかを把握することが有効であると示唆された。